

カスバル・シヤムベルゲルとカスバル流外科(上)

ヴォルフガング・ミヒエル

カスバル流外科の元祖カスバル・シヤムベルゲル (Caspar Schanberger、一六二三—一七〇六年) の日本における活動については、本誌第四一巻第一号⁽¹⁾においてすでに論じたが、ここでは、シヤムベルゲルの「教え」及びカスバル流外科の原形の諸問題を考察したい。

(一) シヤムベルゲルの外科学に関する知識

カスバル・シヤムベルゲルは、一四歳になつた一六三七年から出生地ドイツ・ライプチヒにおいて三年に亙り外科医ギルド長クリストフ・バッヘルト (Christoph Bachert) に外科学の基礎を学び、一六四〇年に外科医の資格を与えられた。⁽²⁾ 彼が受けた教育の概略は、ギルド規定に含まれている試験項目から読み取れる。⁽³⁾

- 一 頭について
- 一 頭蓋について
- 一 脳硬膜と脳軟膜について
- 一 首、胸について

- 一 腹の傷と内臓が射抜かれた傷について
- 一 肩と腰について
- 一 腕と足について
- 一 手足の脱臼と捻挫について
- 一 手足の骨折について
- 一 手足の射創について
- 一 手足の切り傷について
- 一 関節の負傷について
- 一 傷口の開き、炎症について、
- 一 腫れた傷について
- 一 致命傷について
- 一 止血、飲み薬、粉による止血について
- 一 瀉血について
- 一 症状と発作について
- 一 危険な損傷全般について
- 一 膏薬の効力と作用、性質について
- 一 膏薬の準備と調合について
- 一 仕事場の設置とその設備について」

三〇年戦争で荒廃した中央ヨーロッパにおいては様々な伝染病が多発している。国際貿易上の拠点都市ライプチヒが

二〇年代以来払ってきた犠牲は大きかった。カスバルが見習いを始めた一六三七年には、ペストの流行により市民の二割が死亡した。⁽⁴⁾町の経済基盤が脆くなる中で、食料品が不足し、さらなるペストの流行に加えて、一六四〇年には、ケ―ニヒスマルク (Köigsmarck) 將軍の率いる軍隊との戦闘が相次いでいたとライプチヒの年代記はその当時の悲惨な様子を生々しく伝えている。若きシャムベルゲルが、射創、切り傷、突き傷、骨折、種々の腫物及びペストの病状を十分に見る機会があったことは想像に難しくない。

「優秀な成績で」外科医の職人資格を得たカスバルは、ギルドの掟に従って修行の旅に出かけた。一七〇六年、シャムベルゲルの葬儀の時印刷された「弔辞」に挙げられている地名を総合すると、彼は中欧、北欧を転々とし、最後にアムステルダムにたどり着いている。⁽⁶⁾外科医として東インド会社に応募してきた者は、検定試験を受けなければならなかった。その試験内容は、かつてオランダのミデルブルッヒで外科医を勤めていたコルネーリス・ヘルス (Cornelis Heris) 著の「外科学の試験」(Examen der Chyrurgie) に見られる。これは東西両インド会社のために書かれたもので、アメリカ及び東アジアを目指す「若手の外科医」用参考書であった。初版と第二版には発行年が記載されていないが、第三版は一六四五年の発行になっている。発行者はその前書きで、この本を船員や同行者の世話及び健康管理を担当する「優秀で知的な外科医」の雇用に役立てて欲しいと述べている。その外科学の範囲はライプチヒの外科医ギルド規定とほぼ一致するが、この著書によって各々の項目の内容とその重要さの度合いの詳細が明らかになる。

まず目に付くのは、本の半分以上を占める、頭から足までのあらゆる膜、筋、血管、腱、骨、体内の臓器、性器等々、人体についての驚くほど詳細な解剖学である。所々の指摘によれば、Spiegelius, Laurentius, Bartholinus など、最新の研究が生かされており、レベルは決して低いものではなかったことがわかる。⁽⁷⁾これに対して、たった三〇ページで終わっている病理学は、四素及びその性質、四体液、これら体液のバランスが崩れることから発生する病気のことなど含むギリシャ・ガレノス流の体液病理学に過ぎなかった。治療現場で活躍する外科医の関心は言うまでもなく理論より実践

にあった。

治療に関する記述は、腫物、外傷、潰瘍、骨折、脱臼、ペストの順で、内容も当時のパレ流外科書の多くとほぼ一致している。腫物については、原因、兆候、特徴や個々の段階におけるそれに相応する鎮静、散らし、促進剤（膿薬）のことが述べられている。外傷なども同様に取り扱われ、単純な外傷か複雑な外傷かによって様々な症状、挫傷、骨折、炎症ごとにとまとめられている。ヘルスが挙げているおびただしい薬品の処方は一切紹介されていない。それについては、それぞれの都市の薬局方を調べなければならない。

本文全体は巧みに構成され、ひとつの問いに対する答えから次の問いが導かれるようになっていく。この「問答書」は試験用の優れた復習書であり、同時に実用的な参考書でもあった。従って「外科学の試験」の評判はよく、繰り返し改訂、増補されている。一六七六年にはアウグスブルクにおいてドイツ語版も出ている。当時、東インド会社が採用した外科医の平均的な知識について知るには、この著作が最も有力な手掛かりとなる。

（二）「カスパー流外科」とシャムベルゲルの「弟子」

紅毛流外科関係の論文、著書の多くで引用されている「阿蘭陀国外科加須波留先生系脈」⁽⁸⁾には、猪股伝兵衛を初めとして、通圓、向井元升（玄松）、鳥飼道節、栗崎道有、山口寿斎、内田藤左エ門、堀意半等々、シャムベルゲルの「弟子」がずらりと並んでいるが、南蛮流外科で著名な栗崎や、シャムベルゲルが日本を去って数年後によくやく商館長の日誌に現われる向井元升のような名前までが記載されていることは、この系譜の信憑性に疑念を起こさせる。また、名称の上では、「カスパー流」は一九世紀まで続いていたが、後世の医師の外科術の方が元祖の教えを遙かに越えていた。従って、上記のような系脈図や家系図は、「カスパー流文獻」の伝達史及び人脈図を示す資料として理解した方がよさそうである。カスパーの名前を一種の箔付けとして利用している場合も確認されるので、詳細な調査を抜きにして結論はまだ

出せない。また、シャムベルゲルの滞在期間、任務内容及び行動上の厳しい制約を考えると、本来の意味での「弟子」を養成することには到底至らなかつたであろう。従つて、いわゆる系脈図にはとらわれず、まずシャムベルゲルと直接接触していたか、それとも当時、関係資料を入手していたと考えられる数名の人物について考察したい。

猪股伝兵衛（?）一六六四年

後世に文献を残すという意味において最も恵まれた立場にあつたのは、出島蘭館の通詞猪股伝兵衛である。オランダ語よりポルトガル語に精通していた伝兵衛は、一六四六年の江戸番通詞をしており、当時の蘭館医マタイス・クラウゼン (Mathijs Crousen) が非常によい待遇をうけていたことから、大目付井上政重等の幕府の高級官吏が紅毛医学に対して強い関心を抱いていたことを読み取れたであろう。¹¹一六四九年〜五〇年、伝兵衛は石橋庄助(助左衛門)と老通詞西吉兵衛と共にオランダの使節団の世話をしている。一六五〇年四月に東インド会社の特使フリシウス一行が長崎へ戻つた後も猪股はバイレフェルト、スヘーデル、シャムベルゲル、スミットと共に江戸に残り、同年一〇月まで様々な患者の治療に当たつたシャムベルゲルの説明、指示、処方等などを通訳した。

シャムベルゲルが江戸で得た評判を考ええると、長崎の両奉行、大目付井上、治療を受けた稲葉美濃守政則及び井上の侍医トーサクなどが、彼の医術に大いに興味を持ったことは想像に難くない。信憑性の高い「阿蘭陀外科秘方秘伝」及び「阿蘭陀外療集」に基づいて宗田一氏がすでに紹介しているように、慶安三年九月及び一〇月(一六五〇年一〇月及び一二月)、長崎の両奉行に、カスパルの治療法についての報告書が提出された。¹²九月の文書は江戸で、一〇月の文書は長崎で作成されており、その他の外科写本及び元禄七年(一六九四年)の「相伝一牒」¹³、享保五年(一七二〇年)の「加須波留伝来記」¹⁴、享保一四年(一七二九年)の「阿蘭陀免許状」¹⁵及び「阿蘭陀縁起」¹⁶にも伝兵衛の名が現れるので、カスパル流外科の原典と目される慶安三年の文書の著者は、猪股以外には考えられない。

蘭館日誌に書かれた記述が裏付けているように、シャムベルゲルの後任者ハンス・ユリアン・ハンコ (Hans Jurian

Hancock)が一六五六年〜五七年に互つて向井元升に教えた際、病理学、薬学などの内容及び用語などが大きく異なる西洋医学関係のものを翻訳する作業は、非常な困難を伴い、出島の通詞は全員息をつく暇もなかった。⁽¹⁷⁾半年間も江戸にいて、たった一人の通詞として通訳を担当し、最終報告書をまとめた伝兵衛が紅毛流医学の伝達史上挙げた業績は確かに大きい。それにも関わらず、当時の商館長の多くは、彼のことをずるがしこくて抜け目のない人物と評した。⁽¹⁸⁾彼が自分の一存で患者をシャムベルゲルのもとに連れてきたのも、恐らくはそのことに見返りが約束されていたからであろう。⁽¹⁹⁾大目付井上との関係も次第に悪化した。⁽²⁰⁾

猪股のキャリアはそれ相応に惨めな終りを迎えた。一六五五年の蘭館日誌によれば、彼は商売気を出しすぎてしまつたようである。通詞志築孫兵衛と一緒に猪股は、幕府への献上品、珍品などの全責任者であつた井上の目を盗んで、商館長一行が持参してきた珍品の残りの一部を江戸で売りさばっていた。このことが露見すると、それまでの同種の事件も発覚し、ついにはそのことが猪股の命取りになつてしまつた。七月二五日猪股は長崎奉行に辞意を申し出、認められた。あまりにも急なことで、商館長らに別れを告げるのに、夏の終わり頃出島が一般住民に開放される取引の日まで待たなければならなかつた。⁽²¹⁾

恐らく伝兵衛は他の職には就けなかつたため医師の道を歩き始めたのであろう。一六四六年にはすでに参府同行者の一人として、その後継者と目されていた息子伝四郎も、通詞としての将来をあきらめざるを得なかつた。仙台に住み着いた分家には伝四郎を祖とする家系図が残っている。それによれば、伝四郎はオランダ人カスパーのもとで学び、外科医になつたようである。⁽²²⁾彼がシャムベルゲルと会つたかどうかは別にしても、京都大学付属図書館蔵の「紅毛外科書」の始めには、名医、向井元升の門人になつたことを示す記述⁽²³⁾がある。

河口良庵（一六二九年〜一六八七年）

次に取り上げるべき人物は、長崎在住の若い医師河口良庵春益である。河口家の歴代の医師についてはすでに川島恂

二氏が詳細に紹介している。⁽²⁴⁾

当時二〇歳の良庵は一六四九年一月にシャムベルゲルのもとで教えを受けたと思われる四人の医師のうちの一人であった可能性もあるが、確たる証拠はない。しかし、幼年時、彼の父親は平戸の松浦家に仕えており、同じ平戸でポルトガル語の通詞を勤めていた猪股を知っていたこともあつて、伝兵衛から様々な資料を入手した可能性は十分にある。

寛文六年（二六六六年）には、河口の門人野田房頼、良庵よりカスパル流外科の免状を受け河口家の養子、河口良閑となる。その免状とともに、「阿蘭陀流縁起」の一卷も現在残っており、それには、いわゆるブレスケンス号事件やフリシウスの使節団のことや、江戸での砲兵スヘーデル及びシャムベルゲルの活動などについても書かれており、これらは良庵がカスパルが来日した慶安二年の出来事について事細に知っていたことを証明している。⁽²⁵⁾

六〇年代後半頃、河口は長崎を離れ、京都に移住した。おそらく彼は宮廷に職を得ようとしたのであろうが、川島恂二によると、中国系の妻を持ち、キリシタンであるという噂がかなりの妨げになったようである。一九三八年に紹介された京都の岸本家の家系譜によれば、河口には京都滞在中に、小野氏友庵良悦及び三牧宗庵という弟子がいた。また、その二年後には、岸本宗圓政時（前田助左衛門）がこの二人から医学を学んでいる。⁽²⁶⁾ 小野は後に宮崎と名乗り、越前大野に移り、土井支藩に仕官することになった。⁽²⁷⁾ その宮崎家所蔵の「免許皆伝」中にも、享保五年（一七二〇年）付の「加須波留伝来記」というものが見られる。⁽²⁸⁾

河口との関係を記した家系譜の他に、岸本家には「賀須波留十七方」（二帳）が伝わっている。⁽²⁹⁾ この文献の信憑性については上記の「加須波留伝来記」が証明している。両文献には慶安二〇年（一六四三年）に起きたブレスケンス号事件と一六四九年のオランダ代表団の来朝のことが記されており、「迦毘端梵論胡須」（Antonio van Brouckhorst）、「外科加須波留」及び「石火箭兪利耶牟」（Jurian Schedel）等の名前も挙がっている。⁽³⁰⁾ また、個々の事件の日付に関してもこれらの文書の著者たちは、「蘭学事始」の冒頭でカスパル流について述べている杉田玄白よりもはるかに正確に記述しており、

この点特に注目すべきであろう。⁽³¹⁾

先妻との間に産まれた長女於蝶が伊予大洲城下の徳正寺に嫁したということもあつてか、河口は一六七〇年頃大洲へ移住することになった。そこにはかつて河口の門弟であつた鎌田良球政信が住んでおり、師弟関係がさらに深まつたのではないかと思われる。大洲で彼は、シャムベルゲルやその後任者たちの西洋医術と中国医学がブレンドされ、体系的に構成されている「外科要決全書」(一六七〇年)をまとめた。⁽³²⁾ 五九歳の良庵は貞享四年二月六日大洲で歿した。⁽³³⁾

かつてシャムベルゲルの指導を直接受けたかどうかは不明であるが、河口良庵は、出島商館からの情報を熱心に集めたり勉強したりしていたに違いない。長崎で一六六六年にまとめ上げた六〇〇語以上から成る「阿蘭陀語」という語彙集⁽³⁴⁾、また大洲で編纂した「諸薬口和」⁽³⁵⁾もその意欲を裏付けている。京都と大洲に移り住んだために、彼の資料が幾重にも写されることになったのであろう。また、宮崎、小野、岸本などのことを考えると、初期紅毛流医術が短期間に国中に広まっていたことも注目に値する。その写本の内容からみても伝達史からみてもこの河口系脈こそが最も明確なものである。

侍医トーサク(？)一六五四年)

さらに、西洋医学関係の資料を持っていたのは、すでに紹介した大目付井上政重の侍医トーサクである。⁽³⁶⁾ しかしながら、明暦の大火により、井上の両邸とともにその文書は焼失してしまつたものと考えられる。⁽³⁷⁾ 今日残っているカスパル流資料のほとんどが長崎に住んでいた猪俣伝兵衛、河口良庵及び西玄甫に遡るものであることは決して偶然ではない。

西玄甫(？)一六八四年)

西玄甫(吉兵衛)の名は、カスパル系譜には載っていないが、彼はすでに沢野忠庵の元で南蛮医学を学んでいたようであり、シャムベルゲルを無視したとは思えない。東インド会社の資料によれば、彼は特使フリシウスの通詞を勤めていた父親西吉兵衛と共に江戸参府に同行が許されている。⁽³⁸⁾ 西玄甫はシャムベルゲルが毎日患者に呼ばれていることや、大目付などの高官によって評価されていることも見聞きしていた。「西流」の写本が示すように、西玄甫の手元にはシャム

ベルゲル関係の資料があった。

(三) カスパル流医書の諸問題

日本人に対するシャムベルゲルの教えを直接に伝えてくれる原典が残存しないため、カスパル流外科の本来のものがどういうものであったかを定めることは困難を極める。これまでに関場不二彦、富士川游及び古賀十二郎が幾つかの文書を紹介しているが、それらの由来、信憑性、位置づけなどについてはあまり深く踏み込んだ分析は行われていない。³⁹⁾ それらには後世の資料が混在しているという指摘も少なくない。⁴⁰⁾ 従って、「カスパル流」と思われる様々な写本における人名、日付、用語の特徴、内容上の共通点などを考察しながら、それらの背後にあったものと考えられる原典にアプローチする方法を取らざるを得ない。

カスパル流医書を探すうちに、『日本国書総目録』に記載されているものに加えて個人所有の写本が数多く存在していることが分かってきた。それらの所在の確認にもアクセスにも制約があることを考えると、今後とも下記の資料以外のものが出てくる可能性があることを忘れてはならない。

これまでの研究のなかで、宗田一氏が一九八〇年に紹介した「阿蘭陀外科医方秘伝」は各種のカスパル流医書がある程度整理する上で最も重要な手掛かりを与えてくれたものであったといえる。この写本の前書きには、寛永二〇年の陸奥国南部で起きたプレスケンス号事件、当時の商館長エルセラックの活動、慶安二年のプロウクホルスト一行の到着、「火矢打ユリヤン」と「外科カスハル」の長い江戸滞在、九月一八日江戸を立出、一〇月朔日大阪着、続く同二日長崎着、翌年九月二〇日付の出港など、この文献の信憑性を裏付ける極めて具体的な記述が見られる。さらに、「阿蘭陀外科医方秘伝」の最後には以下のような説明がある。

「右此書物者阿蘭陀外科メステルカスハル入津ノ時江戸江罷下諸大名衆御療治無比類手柄多依有是長崎御奉行馬場

三郎左衛門殿因仰編一冊指上申書物之写也予求得之雖秘藏深依為執心免赦之者也直子之外相伝有間敷者也
于時慶安三年 寅九月日⁽⁴¹⁾

この日付はバイレフェルト、スヘーデル、シャムベルゲル、スミットが一〇ヶ月間に亙る江戸滞在を終えた一六五〇年一〇月に当たる。当時、砲術士スヘーデルの「攻城法」が作成されたという指摘は以前からあるが、上記の記述から、シャムベルゲルの医療活動をまとめた報告書も存在したと、宗田は分析している。それを依頼したのは、おそらく西洋技術や医学に強い関心を寄せていた大目付井上政重であり、著者にそれを命じたのは江戸勤務中の長崎奉行馬場三郎左衛門であろう。

以前関場不二彦が論じた河口良庵に遡る「阿蘭陀外療集」の第六巻にある膏薬の一七方の終わりに次の記述が載っている。

「右十七方阿蘭陀外科女須戸呂加津春口伝之通一編二冊指上申候
慶安三年庚寅十月日⁽⁴²⁾」

日付は一六五〇年一月にあたっており、その時、シャムベルゲルは新任商館長ステルテミウスと共に長崎から再び江戸へ発とうとしていたのである。そして、この一七の軟膏薬の処方名称、順番、成分の量が上記の「阿蘭陀外科秘方秘伝」と完全に一致していることも注目に値する。宗田は、おそらく一六五〇年に長崎在勤中の奉行山崎権八郎のために、もう一冊の報告書が提出されたのであろうと説明している。

様々なカスパル流医書を点検するうち、同じ時期のもう一つの文献があることに気が付いた。これは京都大学にある「紅毛外科書」であり、「西先生家秘膏薬方」が含まれているので、西流外科に属すると推定されている。ここにも軟膏薬の「十七方」の最後に日付及び猪股伝兵衛の名が見られる。⁽⁴³⁾

「右紅毛外科メステルカスハル口伝ノ通編一冊指上申候

辛卯年十月七日猪股伝兵衛

「辛卯年十月七日」は西暦の一六五一年一月一九日に当たり、恐らくシャムベルゲルが同年一月一日にバタヴィアへ旅立った直後、猪股がシャムベルゲル日本滞在の二年間に集めた記述を再考したものであろう。

「阿蘭陀外科医方秘伝」を当時の他のものと比較すると、多くの共通部分が明らかになる。⁽⁴⁶⁾ また、これまでに南蛮流の医書とされている元禄六年刊行の『阿蘭陀外科指南』にもそのほとんどが含まれていることは大いに注目に値する。

「阿蘭陀外科医方秘伝」が慶安三年九月に編集された報告の原形に最も近いものと思われる⁽⁴⁷⁾。「阿蘭陀薬」についての記述は同年一〇月長崎で改めて提出された文書にも含まれていたが、河口良庵に拠る「阿蘭陀外療集」及び華岡塾へ伝わった「阿蘭陀加須波留伝膏薬方」にしか残っていないようである。特に河口良庵と西玄甫に遡る文書の中には上述の書からの重要な部分が見受けられる。このため、カスパル流医書の伝播には少なくとも三本の流れがあったのではないかと考えられる⁽⁴⁸⁾。江戸の報告書はこれまで分かった限りでは二冊の書のみとその痕跡をとどめている。これはシャムベルゲルが日本を離れて六年もたたないうちに、数多くの重要な文書が灰になってしまった明暦の大火が原因だと思われる。また、カスパルの「十七方」を含む書は数多く見つかったが、「十七方」以外にはシャムベルゲルの痕跡はほとんどないため、上記の三グループに帰することはできず、狭義のカスパル流医書としては認められない。しかし、この広がりを見ると、当時この膏薬方もっとも重視されていたことがわかる。「理論」に関しては従来通りの東洋医学の病理学が普及していたようである。

シャムベルゲルの「教え」の重要な部分は元禄九年刊行の『阿蘭陀外科指南』に含まれていることも大いに注目される。幾つかのの膏薬には出典としてカスパルの名が付いているが、その他の章はシャムベルゲルから切り放された形の方が、多くの読者によりた易く受容されていたのであろう。また、金瘡についての記述のみはそれよりも早く長崎在住の中村宗興の手に入り、貞亨元年刊行の『紅毛秘伝外科療治集』に「金瘡治要」として取り入れられている。⁽⁴⁹⁾

「水戸中納言様小性 足ノ療治」稲葉美濃 守殿筋痛ノ時療治、 一井上筑後守様坊主 衆療治」井上筑後守 殿御用被召上薬物之 事」	阿蘭陀薬	カスハル十七方（煉様）	カスハル十七方（概略）	金瘡	腫物	熱寒風痰見様	外科総論	章	
○	○	○	○	○	○	○	○	「阿蘭陀外科 醫方秘伝」(二 六五〇年)	(写本、故佐 藤氏蔵)
×	○	○	○	○	○	○	○	「阿蘭陀外 療集」	(写本、慶応 義塾大学)
×	×	○	○	○	○	○	○	「阿蘭陀外 科書」(二六五 八年)	(写本、杏 雨書屋)
×	×	○	○	○	○	○	○	「紅毛外科 書」(二六五一 年)	(写本、京 都大学)
×	×	○	○	○	○	○	○	「阿蘭陀外 科書」(二六五 八年)	(写本、慶応 義塾大学)
	×	○	○	○	○	○	○	「阿蘭陀外 科指南」(二六 九六年)	

<p>A (江戸)</p>	<p>一六五〇年十月</p> <p>江戸において通詞猪股伝兵衛が長崎奉行馬場三郎左衛門のため報告書を提出する。</p>	<p>⇐</p> <p>「阿蘭陀外科医方秘伝」(故佐藤氏、阿蘭陀加須波留秘方)(成田)</p>
<p>B (長崎)</p>	<p>一六五〇年十一月</p> <p>長崎において通詞猪股伝兵衛が長崎奉行山崎権八郎に報告書を提出する。それはAの写しと思われる。</p>	<p>⇐</p> <p>河口良庵</p> <p>「外科要訣」(河口家、「阿蘭陀外療集」(慶大、「カスパル伝方」(京大、「阿蘭陀外科書」(杏雨)、「阿蘭陀外科書」(慶大、「阿蘭陀外科書」(九大、「外科加須波留方」(慶大)、「阿蘭陀流伝授本」(宗田氏)、「阿蘭陀外療一流書」(宗田氏)、「阿蘭陀外療秘伝」(慶大)、「阿蘭陀流外治」(慶大)、「紅毛外科」(慶大)</p>
<p>C (長崎)</p>	<p>一六五一年十一月</p> <p>通詞猪股伝兵衛による文書。A・Bの写しか改訂か。</p>	<p>⇐</p> <p>西玄甫</p> <p>「阿蘭陀十七方」(京大)、「阿蘭陀外科」(京大)、「阿蘭陀外科書」(慶大)、「阿蘭陀外科集」(京都、和田氏)、「阿蘭陀南蛮口一切和」(京大)</p>
<p>D</p>	<p>由来の断定できないカスパル流文書</p>	<p>「阿蘭陀流外科」(京大)、「阿蘭陀流外科書」(京大)、「阿蘭陀加須波留秘密之方」(宗田氏)、「阿蘭陀流外科書伝」(慶大)、「阿蘭陀外療秘伝」(慶大)、「紅毛膏液」(東大)</p>

(四) カスパル流「外科学」

続いて上記の写本に見られるカスパル流外科学の概要を示すことにする。

体液病理学

多くのカスパル流文書の巻頭には、単純な病理学の概略が見られ、⁽⁴⁹⁾「阿蘭陀医方秘伝」⁽⁵⁰⁾はかなり初期の様々な追加により、雑然とした形式を示している。

「一 夫人間之五體ニウモルト云血ノ名四ツ有一ツニハサンキニツニハコレラニツニハヘレマ四ツニハマレンコンヤ右四色之サンキト云ハ血ノ事也コレラト云ハ血ノ上澄薄血也ヘレマト云ハ血ノ内ニ有水也マレンコンヤト云ハ血ノ力也右ヲ地水火風ノ性ト云也サンキト云血ノ性ハ熱ニシテ濕也コレラト云血ノウハスミノ性ハ熱ニシテ燥也ヘレマト云血ノ水ノ性ハ寒ニシテ濕也マレンコンヤト云血ノ力ハ性ハ寒ニシテ燥也然ニ右四色ノ血何モ五體ニ相應スル時ハ無病大過不及有時ハ諸病モ發瘡腫物モ出来ル也右四色ヲ損傷モノハ風寒暑濕飲食或ハ淫事過シテ腎水衰へ心火タカブリ或ハ金瘡打身或ハ遠行ナトシテ血ヲコタリ氣血不和合シテ必発ル其源ヲ能問明可療治也」⁽⁵²⁾

グレコ・ガレノス風の体液病理学は一目でそれを分かるほど簡潔にまとめられており、四つの体液やその基本的性質、体内でのこれらの正常混合 (Eukrasis)、また病気の原因となる異常混合 (Dyskrasis)、生来の温かみ (Calidum innatum) など、もつとも重要な術語も確認できるが、当時の著者や読者がこの文章を西洋伝統医学の知識をもつ我々と同様に理解していたとは思えない (図三)。

「血ノ上澄薄血」、「血ノ力ヲリ」、「血ノ内ニ有水」という片仮名表記の用語に付け加えられた説明からみても、異質の理論に接する際の問題が窺える。体液論の詳細を把握することなしには、それを構成している各概念を理解することは難しく、翻訳も無理なことであった。また、受容者側のこういった多大な困難に加えて、それを伝える側の理髪外科医の

方も病理学に関してはそれほど力を入れた養成を受けていなかったことも見過ごしてはならない。シャムベルゲルや一七世紀後半の彼の後継者の多くは体液などについての細かな知識は持つておらず、せいぜいある医書に基づいて説明できるに過ぎなかった可能性が大きい。結局、彼らが消極的であったため、紅毛人から医術を学ぶ日本人の方もこのややこしい問題の解明にあらたな努力をしなかったといえよう。

「熱寒風痰見様」

一七世紀のヨーロッパにおけるパレ流外科書は腫物を「単純な腫物」と、「複合腫物」と大きく二種類に分けていた。第一のグループに属する四種はそれぞれが四種の体液のうちの一種の過剰をその原因としていた。第二のグループも体液の異常混合によるものとされていたが、この場合、他の原因も加わって、多少複雑な混合形になっている。概念上はもともと体系化の進んでいたこのグループは、ヘルルスなどの理髮外科医のための書物にも見られる(図四)⁽⁵³⁾。

図三

(原文での名称)	(当時の解釈)	(語源。ラテン語、ポルトガル語)	(現代の訳語)
ウモル		humor (ン)´ humor (ポ)	体液
サンキ	血	sanguis (ン)´ sangue (ポ)	血液
コレラ	上澄薄血	cholera (ン)´ cólera (ポ)	黄胆汁
ヘレマ	血ノ内ニ有水	phlegma (ン)´ fleuma (ポ)	粘液
マレンコンヤ	血ノヲリ	melancholia (ン)´ melancolia (ポ)	黒胆汁

図 四

原因になる体液	腫物の基本的な型	下位分類
Sanguis (血液)	Phlegmon (熱)	Phygethlm, Phyma, Furunculus, Carbunculus / Anthrax, Ophthalmia, Synanche, Bubo, Gangrena, Estiomena, Sphacele, etc.
Cholera (胆汁)	Erysipelas (熱)	Herpes miliaris, Esthiomenos excedens, Formica, Impetico, Exanthema, etc.
Phlegma (粘液)	Oedema (寒)	Hernia aquosa, Hernia ventosa, Hydrocele, Testudo, Ascites, Timpanites, Leucophlegmatia, Scrophulus, Atheroma, Steatoma melicerides, Ganglion, Nodus, Scrophula etc.
Melanchoilia (黒胆汁)	Scirrhus (寒)	Scirrhus exquis, Cancer, Elephantiasis, Myrmecia, Clavus, Thymus, Varix, Morphea nigra et alba

「阿蘭陀外科医方秘伝」などに見られる「カスパル流分類」はこれとの類似性を示している。最初の三種の腫物は確かに上記の基本的な「体液」から導かれている。しかし「ヘンテ」、即ち「風氣」による四種目の腫物は「水気性の体液」(humor aquosus) と「風気性の体液」(humor flatuosus) という性質上の分類に由来しているようである。パレ(一五〇〇〜一五九〇年)は体液の「水気性」と「風気性」を基本的な観点と見なしていないのに対して、同時代のファブリキウス・アブ・アクワペンデントエ(Fabritius ab Aquapendente、一五四七〜一六一九年)や中世のギー・デ・シヨリアック(Guy de Chauliac、一三〇〇〜一三七〇年)のような研究家は、「水気性の腫物」と「風気性の腫物」を上記の四体液によ

る腫物と同じレベルで取り扱っている。⁽⁵⁴⁾

次に Phlegmone を記していると思われる例を挙げる。

ヘイヒリト云テ熱ノ事也サンキト云血ヨリ発ル

「二熱湿ヨリ生ル腫物ハ色赤シテ甚痛強シ療治ニ日先初テ発時ハ押葉ヲ付テ良押葉ノ性ハ寒燥ニシテシムル性ノ薬付ヨ其子細ハ寒ノ以テ熱ヲサマシ熱ノウモルヲ押留燥ヲ以テ身ヲ強濕ヲ燥シサテシムル性ニテ惣テ血ノヨラスヤウニスル也

熱ノ腫物押葉

野イバラノ油

一 ヲ、リヨロサアト

一 ヲマヒキクサノ花アフラ

小茄子ノミアフラ

一 ヲ、リヨソレトロン

一 ヲ、リヨロウリイニ

黒ツ、ノミノ油

右四味温テ塗付其上ニエンフラストテヘンシイフンヲモメンニ伸テ打其上ヲ卷テ置ナリ一日ニ二度宛付替ル若不散

時ワ熱寒等分ニ合付ベシタトエバ

一 ヲ、リヨロサアト

一 ヲ、リヨヒヨウラス

一 ヲ、リヨソラトロン

一 ヲ、リヨロウリイニ

野菊花アフラ

一 ヲ、リヨカモメリ

一 ヲ、リヨカラアブ⁽⁵⁷⁾

右六色等分ニ合セ温塗付テ其上ニエンフラストテヘンシイフンニエンフラストテヤキロンヲ等分ニ合木綿ニ伸テ付

其上ヲ卷テ置ナリ是ニテ散カ膿カヲ見ルニ散サウ成時ハ散葉付テ散シ膿サウ成時ハ膿葉ヲ付テ膿セ針ヲ刺ベシ針目ニメイチャヲ指入蓋ニエンフラストムズラキニブスヲ打也メイチャニハインリエントアポストロウル⁽⁶⁰⁾ヲヌリ付テ

<p>濕痰ヨリ出タル腫物ハ寒濕也 是ヨリ生ル腫物ハ和ニメホメ カス色白ヘレマト云血水ヨリ 発</p>	<p>風氣ヨリ生ル腫物之事冷タル 次第に温解行時廻リ温リ少キ 時風邪ニアテラレ腫物ト成其 シルシハ腫上リ色ハ白クシテ スキ遍光有也金物ニテ打テ見 ルニ風ノ吹音有</p>			<p>「南蛮流秘伝書」</p>
<p>一 痰ヨリ生シタル腫物ハ急 イリウノ如ク腫上リ少堅シテ 急ニ痛事ナシ療治ハ温テ散之</p>	<p>一 風氣ヨリ生ル腫物ハ手ニ テイロヒテミルニ和ニシテス キ通り光有金ニテ打テ見ルニ 風ノ吹音有</p>	<p>一 寒燥ノ腫物 散薬フリウ ト云テ寒ノ事ノ性ハ熱燥也燥 ヲ以テ身カカエツヨリシテ熱 ヲ以テ冷血ヲ温メトカシ薄ナ シテ散ナリ</p>	<p>一 熱濕ヨリ生ル腫物ハ色赤 シテ甚痛強シ療治ニ日先初テ 発時ハ押薬ヲ付テ良</p>	<p>「阿蘭陀外科医方秘伝」(慶安 三年、一六五〇年)</p>
<p>一 云成寒ト濕ト交合セテ出ル 物也驗ニシテ色白</p>	<p>一 風ノ吹音有</p>	<p>一 ヒリウト云ハ寒ヲ云是ヨ リ出タル腫物ハ身色ニシテ痛 少自然ト腫上ル也療治ハ成程 温散スヘシ</p>	<p>一 一ヘイビリト云ハ熱ヲ云是 ヨリ生ル腫物ハ色赤而甚痛強 急ニ腫上ル也療治ハ初発時ニ ハ押テ散薬ヲ付ヘシ</p>	<p>「阿蘭陀外科書」(万治元年、 一六五八年)</p>
<p>一 云成寒ト濕ト交合セテ出ル 物也驗ニシテ色白</p>	<p>一 風ノ吹音有</p>	<p>一 ヒリウト云ハ冷ヨリ出タル腫 物を云也。身色ニシテ痛少ク。 ジネント腫上ル也。治方ハナ ルホド散スベシ。</p>	<p>一 一ヘイビリト云ハ熱ヲ云也。是 ヨリ生ズル腫物ハ色赤クシテ 甚ダ痛ツヨク急ニ腫上ル也。 治方ハ初発ハ押テ散薬ヲ付ヘ シ。</p>	<p>「阿蘭陀外科指南」(元禄九 年、一六九六年)</p>

(用語)	(語源。ラリラテン語、ポリボルトガル語)	(現在の訳語)
エイビリ	febris (フ)、febre (ポ)	熱
ヒリウ	frigus (フ)、frio (ポ)	寒
ヘンテ	ventus (ラ)、vente (ポ)	風

た『阿蘭陀外科指南』ではこれらの説明が本文の中に含まれている(図五)。ここでもポルトガル語から引き継いだ用語がさらによくつか見られる(図六)。

この腫物の分類は上記のヨーロッパのものとの類似性が見られるが、著者を特定することは、残念ながらまだ不可能である。本来ここには「複合の腫物」である Phlegmone erisipelatodes や Oedema scirrhodes 等々が来るはずであったが、おそらく内容的に把握が困難だったのであろう。又、翻訳の際に仏教などの東洋医学の要素が混ざったようである。例えば、「熱寒風痰」は、六世紀に中国語に翻訳され、江戸時代の日本では未知のものではなかった「金七十論」(Sunkhya-kasika) にみられる「風熱痰」(tridosah) の概念を思わせるものがある。

各種腫物の個別論

上記の「見様」の腫物は原因である体液により定義され、本来の名称を示すものは欠けている。それに対し、引き続き個別論の腫物には、片仮名標記の名称及びその「日本語訳」や説明が付いている(図七)。

個々の腫物の発生、特徴、治療について記されており、南蛮流外科の描写と比べると、目に見えて詳細になっている。

「アフェスト云ハ疔瘡ノ事也大形面手足ニ発其形大豆粒ニシ膿ライタダキ出ル是モ初発ニ痒物ナリ後痛事タエカタ

指「入」也膿血抜ツクシテ後腫物ノ穴浅ナリタラハ
 インクエントテイゲステイホンヲホツリシモメン
 ニ浸シ腫物ノ口ニ付其上ニエンフラストテヤハ
膏薬ノ名
(61)ルマヲ木綿ニ伸テ打也」

所々に説明が付け加えられたのは、未知の概念が多かったためであろう。河口良庵に遡る「阿蘭陀外療集」、
 「阿蘭陀外科書」などの写本及び元禄九年に刊行され

シ气ヲ失程毒血也針タチワリミルニ底ニ堅リタル膿アルヲ取出シテ其跡ニインクエントアボストロウルンヲホツリ
 木綿ニ浸押込其上ニエンフラストムスラキニブスヲ付ルナリサリナガラ面ニ発疗ニ針ヲスベカラズ心経肝経ニ発疗
 杯ニ針スレハ血走テ不止故ニ死也和成療治ノ仕様ハ先白キ物ヲイタタキ出ル其白キ物ヲソツト切テステインクエン
 トハシリコンヲホツリニ付テ下地ニ付テ其上ニエンフラストムスラキニブスヲ付ルナリ」⁽⁶⁵⁾

図 七

(原文での名称)	(原文の解釈)	(語源。ラニラテン語、ポロルトガル語)
アツフスディミ	癰	Apostema (フ)´ apostema (ホ)
カランゲイシヨ	疽	Cancroma (フ)´ carangueja, caranguejo (ホ)
アフセス	疔瘡	Abcessus (フ)´ abcesso (ホ)
カンゲレナ	麻木	Gangraena (フ)´ gangrena (ホ)
ハナリシヨ	標疽	Panaritis (フ)´ panaricio (ホ)
アカブソ	水腫物	Hydrops (フ) (64)
アルニヤ	キン玉ニ出来ル腫物	Hernia (フ)´ hernia (ホ)
シイロ		Scirrhus (フ)´ escirro (ホ)
カンコロウ		Cancer (フ)´ cancro (ホ)
アネウリツマ	心経腫	Aneurysma (フ)´ aneurisma (ホ)

後世の文書では腫物の数が「阿蘭陀外科医方秘伝」よりもいくらか多く記述されている。所々の漢字訳は東洋医学の概念への転用を示している(図八)。

図 八

				アネウリツマ (心経腫)	カンコロウ (小瘡疥癬の類)	ヤシイロ	アルニヤ (キン玉ニ出来ル腫物)	アカブソ (水腫物)	コレラ	ハナリシヨ (標疽)	カンゲレナ	アフセス (疔瘡)	カランゲイシヨ (疽)	アツフスデイミ (癰)	「阿蘭陀外科医方秘伝」
				ゼイルメンズ (下疳瘡)	カンコロウ	ヤシイロ	アルニヤ	アカブソ	コレラ	ハナリシヨ	ガンゲレナ	アフセス、カルフンコ	カランゲイシヨ	アツフスデイミ、カンダラス	「阿蘭陀外科書」(万治元年)
				セイルメス	カンコロウ	ヤシイロ	アルニヤ	アカブソ	コレラ	ハナリシヨ	カンゲレナ	アフセス	カランゲイシヨ	アツフスデイミ	『阿蘭陀外科指南』
				ハルサスリゼイル (喉之痛)	ヘストロ (急所ノ腫物)	ケントロホツク (疱瘡)									

腫物の経過をヨーロッパ古典では「発生」「成熟」「最盛」「収縮」の段階に分けていた。この考え方はカスパー流医書の記述にも見られる。発生期の腫物は「押葉」(Repellativa)で押さえようとした。「散葉」(Resolutiva)は病因となる物質を揮発性の蒸気に変えるとされた。腫物の発生を止められない場合は逆に「膿葉」(Maturativa)により化膿を早めようとした。化膿したものは「ランセイタ」(lanceta)で切開し、「メイチャ」(ポルトガル語 mecha)と呼ばれた糸を挿入し、膿などを出してしまう。それから薬油と軟膏をすり込み、「肉の成長」を促進する膏薬を付ける。「阿蘭陀ハ腫物ニシテ葉ヲモ不付子細アリ」というふう⁽⁶⁶⁾に説明の背景を示す箇所もある。軟膏としては Unguentum Apostolorum, Unguentum Basilicum, Unguentum Aegyptiacum, Unguentum Camphoratum, Unguentum Aureum の名が挙げられている。膏薬としては Emplastrum Defensivum, Emplastrum Diachylon, Emplastrum Mucilaginosus, Emplastrum Diapalmae, Emplastrum Meliloti, Emplastrum Oxycroceum を用いた⁽⁶⁷⁾。

「金瘡の部」

当時のヨーロッパの外科書と同様に、腫物の部の次には傷の部が続く。その冒頭には「致死傷」についての記述があり、「阿蘭陀外科医方秘伝」では「ハルスランド」という明らかにラテン語系でない題名が目につく。オランダ語の hart (心臓)の片仮名表記として「ハルス」は考えにくいので、おそらくこれはドイツ語の Herzwunde (心臓の傷)だと思われる。中村宗興はこの金瘡の部をどこから入手し「金瘡治要」という題名で貞亨元年(一六八四年)刊行の『紅毛秘伝外科療治集』に取り入れている。さらに、「口伝」によるものとして療治可能な傷の章及び突傷、弓傷、鉄砲傷の記述が、要約された形で寛文一〇年(一六七〇年)刊行の『阿蘭陀外科良方』の第四巻にも見られる。

この金瘡部の内容上の主なテーマは次頁の通りである(図九)。

長さ、テーマの順番の上での相違点はあるものの、文章の内容を比べると、これらの「金瘡部」は間違いなく同じ文献(猪股伝兵衛の報告)に由来するものと断言できる。治療可能な傷の場合は、その傷を木綿と暖かい焼酎できれいにし

図九

			女ノ頭ノ疵	頭ノ疵	ネルボノ疵（髄筋疵）	血ヲ止ル事	打疵、碎タル疵、高ヨリ落 ナトシタル疵	切疵初テ療治ノ仕ヤウ	骨杯切離タル時	ハルスランド	金瘡	「阿蘭陀外科医方秘伝」
ど	胸疵、肺疵、胃ノ腑疵等な	頭ノ疵	髄筋ノ疵	疵縫様	突疵	碎タル疵、鉄砲疵	腹ヲ切腸出タル時	筋切タル筋切タル時	療治可成疵療治ノ事	療治不成疵	金瘡部	「阿蘭陀外科書」卷二
ど	胸疵、肺疵、胃ノ腑疵等な	夫人頭ノ疵	頭ノ疵之事	髄筋疵之事	疵ノ縫ヤウ	血止ル事	突疵	腹ヲ切腸出タル時	不死疵療治ノ事	必定死疵之事	金瘡治要	「紅毛秘伝外科療治集」卷二
ど	胸疵、肺疵、胃ノ腑疵等な	頭ノ疵	髄筋ノ疵	疵ノヌイヤウ	血ヲ止ル事	突疵	碎タル疵、鉄砲疵、高ヨリ 落ナトシタル疵	腹ヲ切腸出タル時	（不死疵療治ノ事）	必定死疵之事	金瘡部	「阿蘭陀外科指南」卷三

てから、麻の糸に蠟をつけて、まず傷の真中を一針据え、脇は傷の長短により間を五分程宛て縫う。糸は、傷の脇に結んでおく。卵の白身と椰子の油を等分に粘りが無いように混ぜ合わせ、「ホツリ木綿」を傷の長さに拵え卵の白身に浸し、

傷に付ける。冬は一日に一度、夏は二度、宛葉を付け替える。五日ないし七日後に、糸を切つて抜き、付葉には卵の黄身を「ヨ、リヨテレメンテイナ、ヨ、ヨリヨイツヘリコン」と一緒に木綿に浸して付ける。肉が八九分目に上がった時は、「エンフラストテヤハルマ」を木綿に伸してその膏葉を巻き付ける⁽⁶⁷⁾。

「止血」の章ではガレノス説を反映する形で動脈（ポルトガル語、ラテン語 *arteria*）と静脈（ポルトガル語 *veia*）について述べられている。

「アルデリヤト云ハ心経ヨリ出ル血ナリ此血色少薄シテ上タノ紅ノ如シ出ルニ走リトブスヘヤト云ハ肝経ヨリ出ル此血ハ色コクシテ出ルニシツカニ流ネバキ血ナリ」⁽⁶⁸⁾

「阿蘭陀外科医方秘伝」によれば、シヤムベルゲルは傷の四つの処方を紹介している。

「一色ハ疵ヲ焼酒ニテ洗ヌウテ止ルニツニワ打破リ肉タタルヲバ切テ捨ウサギノ毛ヲ細ニ刻ミ乳香アゼベレノ木皮粉ニシテ合疵ノ口ニホツリニ付テツクル血止テ後ハ玉子ノ白ヲ木綿ニ浸付テ其上ニ酢ニ水ヲ合木綿ニ浸蓋包縫置ナリ右ニ云アネウリツマノ血ヲ止ル葉モ良三ツニハ血筋ヲ縫事右ニ云心経ノアネウリツマノ血ヲ止ル如シ四ツニハ血ノ出ル口ヲ焼止ル事はハ腫タル所ヨリ血出ルヲ焼テ止リ血モ止物ナリ焼タル跡ニハ丹礬ヲ焼テ粉ニシテ捻リ掛ルホツリヲ蓋ニメ愈々置ナリ血ヲ止テ三日置テ其後疵ノ養生スルナリ但是ハ古流ナリ當流ニハ右ノ如ニ焼酒ヲ温テ血ノ止ルマテ洗」⁽⁶⁹⁾

さらに血石はオランダ語の発音でブルウトステン (*bloedsteen*) として紹介されている。

神経の損傷についてはかなり詳細な記述の冒頭にポルトガル語由来のネルボ (*nervo*) の定義が目につく。

「ネルボノ疵四色有　ネルボト云ハ髓筋ノ事ナリ髓筋ト云ハ筋ニ血モナク堅筋也」⁽⁷⁰⁾

神経の所在についての説明を反映する「髓筋」というのは訳者が新しく造語した日本語であり、正確な理解に至つていたとは思えない。訳語の「髓筋」は後世の多くの文書に伝わり、中村宗興の『紅毛秘伝外科療治集』及び『阿蘭陀外

科指南』により一般に定着したようである。⁽⁷¹⁾

このネルボの傷害は四種に分けられている。

「一ツハネルボ突疵」二ツニハネルボ横ニ半分切タル疵三ツニハネルボ皆切タル疵四ツニハネルボ立ニ割タル疵」

頭の切疵、突疵、打疵についての記述は極めて詳細なものになっている。「阿蘭陀外科医方秘伝」は女性の頭傷をもつて金瘡の部を終わらせているのに対し、「阿蘭陀外科書」及び『阿蘭陀外科指南』には胸疵、肺疵などその他の記述が続いている。しかし、ヨーロッパの書ではここに引き続き射創、骨折、脱臼、ペストが、三書すべてに欠けている。

また、疵の關係では「腦ヲ包ム薄ヨウ」(脳膜)、「胸ト腹トノヘダテ皮」横隔膜⁽⁷²⁾、「髓筋」、幾つかの、東洋医学に見られない断片的な記述はあるが、それは体系的な解剖学には至らなかった。⁽⁷³⁾

「阿蘭陀外科書」及び『阿蘭陀外科指南』は「阿蘭陀外科医方秘伝」よりも整理され、いくらか詳細になっている。また、『阿蘭陀外科指南』の内容はあらゆる点において「阿蘭陀外科書」との密接な關係を示している。文献学的には二通りの説明が考えられる。猪股の報告書が元々「阿蘭陀外科書」に見られるような形式であったとすれば、「阿蘭陀外科医方秘伝」では一部が欠落していることになる。あるいは「阿蘭陀外科医方秘伝」がほぼ原型のままであり、後の写本で補足、整理されたのかも知れない。

いずれにしても、この背後にあったヨーロッパの書物についての問題も浮上してくる。別の箇所ですでに紹介しているように、シャムベルゲルは一六五〇年の六月に出島商館から医書を江戸へ送ってもらった。⁽⁷⁴⁾ その中にはパレの著作もあつたに違いない。上記の腫物及び外傷の記述にはパレとの多くの類似点が見られるが、はつきりとした相違もあるもので、シャムベルゲルが複数の医書を用いたという可能性は高い。(あと次号)

文献および英文抄録は次号の(下)の末尾に一括して掲載する。

(九州大学言語文化部)